

[桃山学院教育大学]

コロナ禍での学食提供について

桃山学院教育大学 教育大学事務局 事務室

本学は、大阪府堺市にある学生数777名(5月1日現在)の人間教育学部のみの小規模単科大学である。

このコロナ禍においても、本学の特色である担任(チューター)の強みを活かし、2020年6月から徹底した感染拡大防止対策を講じながら、7月には約7割の対面授業を再開し、2021年度前期においても、約7割の対面授業を行うことができた。

こういったコロナ禍にあつて2021年4月、本学の学生食堂は、名称も一新し「La Pêche(ラ ペッシュ)」として、リニューアルオープンした。運営は、(株)アンデレパートナーズ(本学法人100%出資)と(株)

ORIENTAL FOODSに委託している。(株)ORIENTAL FOODSは、主に関東圏で飲食店を複数経営し、関東の大学食堂での実績があり、マスコミにも取り上げられるなど新進気鋭の企業である。本学での展開を考えるにあたり学生食堂であることへのこだわりから学生に教育の場としての機能をもたせることや、廃棄食材ゼロ活動の推進、そのためのテクノロジーの導入を積極的に進めている。

こういった背景から感染拡大防止の一環として、オーダ当初よりモバイルオーダーシステム、キャッシュレス決済を導入した。学生は食堂の券売機に並んで食券を買うことなく、いつでもどこからでもオーダーが可能で、好きな時間に受け取ることができる。これは混雑防止になると同時に



新たに導入したモバイルオーダーシステムの説明

キャッシュレス決済は現金の手渡しによる感染リスクを回避することができる。これらのシステムは学生にも好評である。

また食堂側のメリットとして、注文履歴の集計による食材の発注にも活用でき廃棄食材を減らすことが期待できる。

残念ながら、2021年4月下旬以降は、大阪府下での感染状況が厳しくなり、感染拡大防止の一環としてメニューを数種類の弁当のみに切り替えた。

また、後援会（保護者・保証人の組織）の協力・支援もあり、「後援会弁当」のネーミングで価格を抑えた形で弁当を提供している。

以前の食堂は、学生の声が賑やかで、BGMがかかっていることも気づかなかった。コロナ禍の今、会話を控え黙々と弁当を食べ終わった学生が、マスクをつけて大きな声を出さずにしばし談笑している。

リニューアルしたこの食堂で、シェフに笑顔で「ごはん大盛りで！」「ありがとう！」と大きな声が聞こえる日ははやくくることを願うばかりである。



[成蹊大学]

ポストコロナを見据えた学食運営

北原 仁 学校法人成蹊学園財務部長

1 新型コロナウイルス感染症による影響

成蹊大学では、キャンパス内に3つの学生食堂（以下「学食」という。）のほか、カフェテリアやコンビニ等を設置し、学生の昼食等への多様なニーズに応えてきたが、新型コロナウイルス感染症対策で授業がオンライン化され、学食の売上げが激減した影響により、残念ながら、これまで学食運営を委託してきた食堂事業者が撤退することとなってしまった。

そこで、2021年4月からの学食の再開を目指し、新たな食堂事業者を選定するとともに、コロナ禍にあっても学生が安全に安心して利用できる学食とすべ

く、厨房を含めた学食の大規模リニューアルを実施することとした。

2 食堂事業者との連携 学食の再開に向けて

コロナ禍にもかかわらず、幸い複数の事業者より提案を受けることができ、早期に新たな食堂事業者を選定できたことから、同事業者の助言や要望等を取り入れる形でリニューアル工事を実施した。

特に座席数が最も多い第一学生食堂については、厨房設備の更新等により厨房面積を縮小し、喫食スペースに約60席分の席数を増加させ、食堂利用者と事業者の双方にとって、よりよい形に設えることができた。

学食のテーブルイスには、全席に抗ウイルスコーティングを施し、出入口等各所に手指の消毒液を設置した。また、テーブル上に飛沫感染防止のためアクリルパーティションを設置して、感染防止対策を講じた。

3 新規オーダーリングシステムの導入

さらに、感染リスク低減のため、次の機能を備える新たなオーダーリングシステムを導入した。

(1) 利用者は、抗ウイルス加工が施されたボタンとキャッシュレス決済機能を備えた券売機より、受付番号が記された食券を購入する。

(2) 食券の注文内容は自動的に厨房に送信され、受付番号が学食内のディスプレイに表示される。

(3) 厨房で料理の用意ができると、ディスプレイ表示と自動音声にて呼出しを行い、利用者が料理を受け取る。

本オーダーリングシステムでは、キャッシュレス決済により食券を購入することで、利用者は硬貨や紙幣に直接触れることなく食券を購入でき、接触感染のリスクを低減できる。現在、学食利用者の20〜25%がキャッシュレス決済を利用しており、今後も利用増が見込まれる。

また、利用者は配膳カウンターから離れた場所で料理の出来上がりを待つことができ、配膳の列に並ぶ混雑や密を回避できるようになった。

4 新たな学食の再開と運用状況

リニューアルされた学食は、予定どおり2021年4月より本営業を開始し、本来の学食の賑わいはまだ取り戻せていない状況にはあるものの、再開された一部の対面

授業に出席する学生により利用され始め、徐々に学生の利用者数も伸びてきている。

学食の運営は、学生の来校者数に大きく左右されることから、特にコロナ禍の学食運営においては、来校者数に応じて営業時間や提供メニューを変更する等、柔軟な対応が必要となる。そのため、食堂事業者とは緊密に連携して対応に努めている。コロナ収束後も、ここで得たノウハウを生かしながら、改善の取り組みを継続していくことが、今後の学食の安定運用に繋がっていくものと考えている。



リニューアルされた学食

[専修大学]

画像提示による食堂混雑緩和の取り組み

専修大学 データサイエンス研究プロジェクト

1 本取り組みの背景

データサイエンス研究プロジェクトは、令和2年度に創立140周年を迎えた専修大学が、21世紀ビジョンである「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」の下、データサイエンスの知見を土台とし、社会的課題の解決策を研究成果として挙げるために開始した研究プロジェクトである。その目的は、学内の様々なデータを集約し、適切な形で可視化することで大学の資源を有効活用し、誰もが快適に過ごすことができる「スマートキャンパス」を実現することである。プロジェクトの構想段階においては、人があふれるキャンパスを想定していたが、コロナ禍で状況が

一転したため、「3密回避」「感染予防」に方針をシフトし、現在活動を行っている。本稿で扱う取り組みは、本プロジェクトの活動の一つである。

2 食堂の混雑緩和の取り組み

本プロジェクトとしては感染予防の観点から、マスクを外して飲食する食堂の混雑を緩和することが重要であると考え、まずこの取り組みを実施することにした。

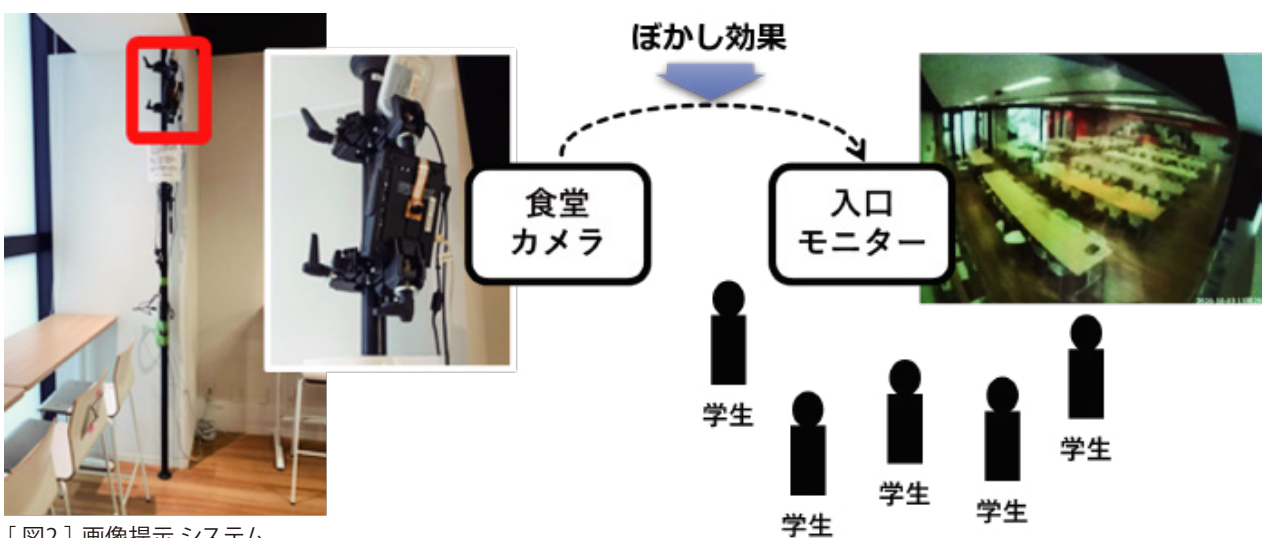
本学は神田と生田にキャンパスを持ち、食堂もそれぞれのキャンパスに複数散在している。そして、いずれの食堂も昼食時などには混雑する傾向にあるが、利用者は食堂に行ってみないとその状況がわからず、混雑を避ける意思決定をすることが難しいという問題があった。

そこで、食堂内にカメラを設置し、撮影された画像を多くの利用者が行き交う校舎の入口に設置したモニターに



[図1] 食堂の混雑状況の提示

提示することで、食事の時間をずらすなどの行動変容を促す感染予防につながるシステムを構築した。ここでは、個人情報保護の観点から、画像から個人が特定されることがないようぼかし効果を入れることとした。また、カメラの設置場所と設定方法を工夫し、既存の設備やネットワークを有効活用することで、その導入・運用にコストをそれほどかけることなく実現した。



〔図2〕画像提示システム

3 その効果と今後の課題

本学が対面講義を再開した令和2年度後期から神田キャンパスにおいて実際に運用をしているが、システムトラブルはなく、食堂がきっかけとなる感染も1件も発生しなかった。また、利用者からクレームが生じるなどの問題もなかった。これらのことは、一定の成果であると考えている。しかし、利用者の行動変容がどの程度生じたかなどの検証はまだできていないため、引き続き運用を行い、その効果について検証していきたい。また、利用者の利便性をさらに向上させるために、スマートフォンでの利用についても検討している。さらに食堂業者からPOSデータを提供していただけるようになったので、①過去のデータをもとにした混雑予測、②現在のデータをもとにした現在の混雑状況、といった利用者の行動変容につながる情報を提示することも検討している。

本プロジェクトではこの他に、WiFi利用情報を用いたキャンパス内の人流・混雑状況の可視化や、電力消費量の分析に基づく電力量の削減手法の検討などにも取り組んでおり、前述した「スマートキャンパス」の実現を引き続き目指していきたいと考えている。